日本選手権で1勝を

出場権懸けた"予選"開幕近づく

有田　全国の強豪と渡り合う、県内唯一の社会人硬式野球チームが有田市を本拠地とする「マツゲン箕島硬式野球部」だ。選手たちは、県内外でスーパーをチェーン展開する「松源」の正社員として早朝から業務をこなし、勤務後は日が暮れるまで野球漬けのハードな毎日を送っている。チームの目標は、社会人野球の最高峰の一つ、日本選手権での1勝だ。その出場権を懸けた全日本クラブ野球選手権の開幕を31日に控え、野球に打ち込む選手・スタッフを取材した。【藤木俊治】

マツゲン箕島硬式野球部

「（トーナメントの）一発勝負で勝つには、技術だけでなく〝心技体〟が求められる。勝ちたい、負けられない思い、会社に対する責任もしかり。それが社会人野球だと思っている」

チーム創設の発起人でもある西川忠宏監督(63)が熱弁を振るう。有田市の有田漁港に近く、海風を感じられるマツゲン有田球場（有田市民球場）では、34人の選手が汗を流している。

激しい入団競争

チームは1996年に発足。地元の箕島高OBらでつくる「箕島球友会」が前身で、2008年にNPO法人を設立し、経営を維持している。日本選手権で史上最多7回の優勝を成し遂げた住友金属野球団が1999年に解散した際は一部選手を受け入れ、県内では唯一の社会人チームとしてその系譜を受け継いでいる。

結果が求められる以上、競争は激しい。入団のセレクションの倍率は3倍から4倍に上り、新卒者を中心に毎年10人ほどが入部。一方で、チーム編成上、それと同数の選手が部を去っていくことになる。選手引退後は家族とともに定住して従業員として残る人もいれば、故郷に帰る人もいる。

クラブの運営は、NPOと行政、民間が協力しあって進める仕組みで、チームは野球教室での指導を担うほか、高齢者施設や津波避難路、保育所での清掃活動など地域活動にも精を出している。11年から市の指定管理者として同球場を運営する他、松源をはじめ賛助会員から寄せられた資金やふるさと納税による寄付を活用するなど、スポーツクラブ運営のモデルケースとして、全国から視察が訪れるほどだ。

不可欠な2選手

2年連続12回目の出場となる全日本クラブ野球選手権では、西近畿代表として16チームの頂点を目指す。投打の軸として期待が懸かるのが、エースの奥田貫太選手(23)＝花園大＝と、主砲の竹中夢翔選手(23)＝専修大＝だ。

右スリークオーターから最速150キロの速球と多彩な変化球を投げ込む奥田選手は今年2月、新人のあいさつで「2年でプロに行きます」と宣言。自身に重圧をかけ続ける。店舗では主に品出しを担当し、来店客から「次の試合も頑張って」と声をかけられるのがうれしい。「決勝まで4試合全て投げるつもりで行く」と闘志をみなぎらせる。

4番を打つ竹中選手は長打力と走力が持ち味で、5月のプロ・アマ交流戦ではオリックス2軍から本塁打も放ち、「一気に自信が付いた」。大学4年間のリーグ戦での出番は代打による3打席のみで、無安打に終わった。甲子園や神宮には縁がなかったが、社会人になって才能が開花し、チームに不可欠の存在になった。

投打充実で勝機

箕島球友会時代を含め、全日本クラブ野球選手権では5回の優勝経験があるが、2019年を最後にタイトルからは遠ざかっている。優勝すれば今秋、大阪市西区の京セラドーム大阪で開かれる日本選手権への出場権が得られる。西川監督は「日本選手権の予選だと思っている。四つ勝って〝本戦〟に出場する」と意気込む。

投打に充実した戦力を備え、「近年で一番」（西川監督）という今季は躍進のチャンスでもある。日本選手権には過去6回出場しているが勝利に手が届いていない。「悲願の1勝」に向けて全力をぶつける。

練習を見つめる西川忠宏監督（左端）＝いずれも有田市宮崎町のマツゲン有田球場で

奥田貫太選手

竹中夢翔選手

和歌る？紀になる！